

上海日本人学校虹橋校における登下校事情と登下校指導実践

前上海日本人学校虹橋校 教諭

鳥取市立城北小学校 教諭 伊藤 憲 栄

キーワード：在外教育施設，上海，登下校，安全指導，PTA連携

1. はじめに

3年間上海日本人学校虹橋校で勤務させていただいた。私が一番初めにさせていただいた校務分掌が「通学安全副主任」というものだった。上海赴任からまるまる2年間、私は60台の登下校バスを取りまとめる登下校指導に関わるようになった。その間、日本の学校では決して知ることがないであろう職務を経験し、その間、日本人学校の中では意外と接点の少ない中国の文化や価値観に接することができた。



下校風景。学校敷地内に何十台ものバスが並んでいる。

2. 上海日本人学校の登下校を取り巻く背景

(1) 上海日本人学校

上海日本人学校虹橋校の児童数は約1500人。「登下校は保護者の責任」という原則があり、保護者が手配したバスを活用して登下校している児童生徒がほとんどである。治安の関係から、学校として児童生徒が子どもだけで通学することは認めていない。

(2) 登下校の形態

「登下校は保護者の責任」という原則のもと、上海日本人学校にはスクールバス（学校が手配したバス）がない。そこで大きく分けて以下のような形態で登下校を行っている。

①バス通

スクールバスがないので、登下校で使うバスは保護者自身が手配している。保護者が住むマンションの中には、サービスとして通学バスを出しているマンションも多い。逆に日本人居住者が少ない等の理由で、通学バスを出していないマンションもある。そういう状況では、保護者同士でバス会社や通学送迎をしてくれる業者に依頼をし、年間契約でバスを手配している。全校児童1500人のうち、1300人以上の児童がバス通学をしている。バスの台数は60台以上。バスの種類や形状はまちまちで、50人弱乗れる超大型バスから、普通乗用車のミニバンまで様々である。

②個人通

上海市に住んでいれば、上海日本人学校への通学が認められている。中には、広い上海市の中で他に日本人があまり住んでいないところに住む児童も通ってきている。そういう児童の多くは、各家庭で送迎をしてもらいながら通学している。タクシーや自家用車による送迎の他に、数は少ないが徒歩で通学している児童もいる。いずれの場合も保護者や家庭で雇っているお手伝いさん等が送迎している。

(3) 登下校を取り巻く学校組織とPTA組織

60台のバスが毎日朝晩の登下校の度に動くとなると、それを統括するものが必要となる。「登下校は保護者の責任」という原則があるので、登下校で使われるバスを統括したり事務的な手続きをしたりするのは、PTA組織の中の「通学安全委員会」という組織である。各バスの保護者代表がPTA通学安全委員会に使用バス・運転者・通学ルート・バスの車検証等を届け出ることによって、校内にバスを乗り入れることができるシステムになっている。

学校組織としては、通学安全主任・通学安全副主任という校務分掌があり、その主任・副主任を中心に通学安全部という組織がある。バス担当の保護者と学校との連絡、PTA通学安全委員会と学校との連絡調整、児童が安全に登校できるようにするための指導、登下校児童会の運営等が主な職務である。校務分掌は基本的に年度初めに決まるが、通学安全主任に限り、主任引き継ぎは例年秋頃である。そのため、日本人学校に派遣された4月に通学安全副主任になると、10月頃に通学安全主任になり、それから1年間主任を務め、残り半年また副主任となるということになる。私も2年間、登下校に関わることになった。

3. 登下校運営と登下校指導の実際

(1) 日々の登下校の様子から

毎朝60台のバスが登校してくる。日本人学校で雇っている門衛さん達がバスの誘導をしてくれる。しかし、何十台ものバスに限られた時間に入出入りする。教職員も交代で児童の安全確保のため玄関先に立つ。

下校時は、60台のバスのほとんどが日本人学校の敷地に入る。児童は下校と共にバスに乗り、バス通学児童の乗車が確認された時点でバスが発車する。そのため、バスへの乗車確認ができない児童が一人でもいれば、バスを発車させられない。約50学級の全てが毎日の下校時刻を守らなくてはならない。

塾に通う児童は届け出をすると、直接塾の送迎担当者に玄関先で引き渡すシステムもある。曜日や日によって下校方法が変わる児童も多く、下校方法の把握が課題の一つである。

(2) 登下校児童会と登下校指導

児童の登下校時の安全意識を育成するため、年間3回登下校児童会を行っている。そこで、バスの登下校の様子を聞いたり、安全・安心な登下校に向けて指導をしたりしている。バス内のトラブルや規則違反、いじめ等、児童の安全・安心が守られそうにない事態があるときには、バスの構成メンバー又は個別に指導を行うこともある。

(3) 運動会

児童1500人と保護者3000人が一堂に集まる運動会は一大行事である。いつもの児童の登下校バスに加え、児童の倍の人数が動く保護者送迎バス、タクシーの動きは大変なものである。児童・保護者の送迎の取りまとめは、PTA通学安全人会と日本人学校の通学安全部とで行っている。

直接送迎に関する話ではないが、運動会入場のために門の前にずらりと並んだ保護者の列を見て、中国人バスドライバーがとても感心していた。どんなときでも、他人の迷惑を考え、列に並ぶことのできる日本人のマナーの良さを絶賛していた。こういう中国人とのお互いの印象のやりとりができるのも、登下校担当者の特権と感じた。

(4) PTA組織との連絡調整

このような状況であるため、PTAの通学安全委員会との連絡調整は、登下校担当として、最も大事な仕事である。60台のバス・通学団体を取りまとめる、PTA通学安全委員の方々のご苦勞の大きさも感じた。PTAの方と接点が多かったのもよい経験となった。

4. 登下校に関わって見えてきたもの

(1) 経済発展をする上海に暮らす日本人児童生徒の環境

通学バス内で児童間のトラブルが起きやすいバスがどうしてもある。児童同士で一緒にいればトラブルはつきものだし、それぞれの児童の性格や特性によってトラブルが起きやすいことも考えられる。しかし、それだけでなく日本人学校の登下校に関わる中で、それ以外にトラブルが起きやすくなる要因があることを知った。

①通学時間

通学時間が長くなれば、児童と一緒にバスに乗っている時間も長くなり、その分トラブルも発生しやすくなる実態があった。身動きのとれない、座席も変えられないバスに1年生から6年生までが乗るのである。トラブルが起きて仕方がないと言えるだろう。中には、通学時間が1時間以上というバスもある。

②添乗者

ドライバー以外に、バスには保護者の代わりとして責任をもって児童を送迎してもらうために添乗者を置くことになっている。いくつかのマンションでは添乗者として保護者が輪番で乗ることになっているバスもあるが、中国人添乗者を雇って乗ってもらっているバスも多い。中国人添乗者の場合、中国語ができない児童（日本人学校のほとんどの児童はそれほど中国語ができるわけではない。）とのコミュニケーションが持ちにくい。また、中国人添乗者と保護者との関係が雇用者と被雇用者となってしまう。（中には児童にも雇用しているという意識がある。）そして、残念なことに差別意識（中国人蔑視）がある児童もある（保護者の影響も大きいように感じられた。）。このような状況の中、やはり保護者が添乗する場合に比べ、中国人添乗者が添乗する場合の方が児童間のトラブルが起きやすかった。

(2) 文化の違い

バスの運転手は中国人ドライバーである。一部のバスでは、保護者が輪番で添乗員としてバスに乗り込むバスもある。しかし、多くのバスに添乗員として乗るのは雇われた中国人スタッフである。マンションの従業員であることもあるし、添乗員として雇われている人もいる。別に添乗のプロというわけではなく、ほとんどの添乗員が日本語はしゃべれない。中国人ドライバーや添乗員とのコミュニケーションは課題だった。

私の主観ではあるが、中国人は時間はきちんと守る。また約束事もルールとして決めた以上は守ろうとしてくれる。ただし、基本的に交通規則に対しては日本人に比べかなりルーズである。例えば、中国ではシートベルト着用は努力義務程度の交通規則となっていて、罰則が科せられるような規則ではない。バスによっては、シートベルトの装備自体がないバスもある。中国の交通文化として、信号無視や追い越し、運転中の携帯電話の使用はしばしば見られる。学校としては、交通規則の厳守と安全運転に努めることを度々お願いしている。そのための連絡の持ち方も課題の一つである。

文化の違い現地の方々を送迎してもらわないといけないう状況だけに、お互いの文化の違いを理解し、具体的にわかりやすく、お願いすべきことはお願いし、守ってもらうべきことは守り、我々も独善的にならないように見直すべきことは見直していく姿勢が大切であることを強く感じた。

(3) 安全・安心な登下校を目指して

児童が交通事故等から守られて安全に、そしてバス内でのトラブルやいじめのない登下校ができるという安心がある登下校を目指して、私達は以下のようなことに取り組んだ。

- ①PTA通学安全委員会との情報交換・連携
- ②校内の全教職員での共通理解・共通実践の体制づくり
- ③情報収集組織の確立と、早く確かな情報収集

④登下校規則の設定と運用

⑤通学担当者やドライバー・添乗員との連絡会

5. おわりに

上海日本人学校に派遣されてから2年間、この職務をさせていただいたが、当初はあまりにもこの職務の特殊性にとまどった。しかし、保護者との関係が密になりにくい超大規模な日本人学校において、登下校とは、保護者により近い立場だったし、地域との接点が少ない日本人学校の中にあって、地域や中国人の方が感じられる分掌であったように思う。

日本人学校に対する保護者の思いを感じ、日本式のシステムが理解しにくい中国の方達のジレンマを感じる事ができた2年間だったと思う。日本の小学校に勤める中で、上海日本人学校のような登下校システムを生かすことはまずないと思うが、この2年間で学んだことは、今後の保護者連携、地域連携に生かしていけるように思う。